短　報

小児の療養環境に関する患者安全教育の試み

沢口　　恵[1)]　　小口　祐子[1)]　　小野　智美[1)]　　小林　京子[1)]

Nursing Students' Patient Safety Education for Creating Children's Safe Medical Treatment Environment

Megumi SAWAGUCHI, RN, Ph.D[1)]　Yuko OGUCHI, RN, CNS, MSN[1)]
Satomi ONO, RN, Ph.D[1)]　Kyoko KOBAYASHI, RN, Ph.D[1)]

〔Abstract〕
It is imperative that nursing students acquire the necessary knowledge and practice to develop and maintain patient safety. Nursing students need nursing practice competency and understanding of patient safety in all areas of nursing. A patient safety education for third grade nursing students was created to assist them to predict accidents and to support children's safe medical treatment environment. A small group of 97 students made assessments and proposed support for children's safety based on three types of photographs：① infant on an IV drip plays in a bed, ② infant on IV drip runs in the corridor and ③ mother changes infants' diaper on the bed. Students discussed practices and the risks of potential accidents from the perspective of growth and development. We analyzed students' written impressions after the class. They learned【deepened understanding of the child-patient safety】,【competency for practice】,【necessary nursing practice】. The first of this educational approach was only theoretical. The next aim is application so that students can use the learning contents in actual nursing practice.

〔Key words〕 children's safe medical treatment environment, patient safety education, nursing student

〔要　旨〕
医療の高度化に伴い患者安全の知識・技術の習得は必須となっており，看護学生も医療従事者として患者安全の理解と看護実践能力が求められている。そこで小児看護学演習においてグループディスカッションによる患者安全教育を実施した。看護学部３年生97名を小グループに分け，小児の療養環境で事故を起こす可能性が高いと考えられる３つの場面の写真を見ながら危険と判断される箇所の抽出とアセスメント，実践方法の検討を行った。学びの共有としてグループ発表と，安全な療養環境を整えるための支援についてディスカッションを行った。授業後に教育支援システムに感想を記載してもらった。感想を分析した結果，学生の学びとしては，【小児の安全に対する理解の深まり】【安全な療養環境への支援に必要な能力への気づき】【看護実践への気づき】があった。来年度の課題は，さらに小児の安全への理解を深め，看護実践へとつなげていくことである。

〔キーワーズ〕 小児の療養環境，患者安全教育，看護学生

1）聖路加国際大学大学院看護学研究科小児看護学・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Sciences, Child Health Nursing

受付　2016年10月28日　　受理　2016年11月25日

Ⅰ．はじめに

WHO 患者安全カリキュラムガイドでは，医療の発展の陰で患者安全が重大な危険にさらされていることが明らかにされ，医療に関与する全員が患者安全の概念に精通していなければならず，医療系の学生についても，それぞれの分野のリーダーになってゆく者として自覚を持ち，安全な医療を実践できるようにならなければならない，とある[1)]。医療の高度化に伴い，医療安全の知識・技術の習得は必須となっており，看護学生であっても医療従事者として患者安全の概念の理解と，看護実践能力が求められている。

小児は成長発達の途上であり，運動能力や認知能力が未発達であること，経験不足であることから自ら危険予知や安全を確保するための対処行動をとることが難しく，好奇心が強いため衝動的な行動もしばしば見られるという特徴をもつ[2)]。小児看護を実践する看護師には，起こりうる行動を予測していても，思いもよらぬ予想外のことが起こるという認識とともに，発達段階に基づいた小児の行動の予測と，患者安全の知識と技術が求められている。看護学生が小児看護を実践する際にも同様のことが求められるが，学習の途中にあり臨床経験の少ない学生に対しては，１年次から積み上げてきた小児の発達と健康，疾病・治療の知識を統合させ，さらに患者安全への具体的な実践方法に結びつけることができるような教育と臨床における実践での支援が必要となる。

看護職員への患者安全教育は，インシデント・アクシデントレポートの報告，事例の分析，危険予知トレーニング[3)]などがある。知識の統合と実践での支援を要する看護学生に対しては，具体的なイメージ化が可能で，より現実に近い状況下での参加型医療安全トレーニング，すなわち事例分析などのグループ討議やロールプレイ，シミュレーションなど，参加型のトレーニング方法を用いた患者安全教育が効果的である[3) 4)]といえる。

そこで今年度の小児看護学演習において，小児の療養環境で事故を起こす可能性が高いと考えられる場面の写真を教材とし，グループでのディスカッションによる危険と判断される箇所の抽出とアセスメント，実践方法の検討という患者安全教育を実施した。演習中心の患者安全教育は今年度が初めての試みである。よって今年度実施した患者安全教育を紹介するとともに，授業後の感想の分析結果から看護学生への患者安全教育の検討と来年度の課題を報告する。

Ⅱ．演習内容

１．カリキュラム

小児看護学は，小児看護の実践に必要な知識を１年次から３年次の小児看護学実習までに段階的に学習できるように組み立てられている。具体的には，１年次『生涯発達論Ⅰ』にて小児の成長発達，２年次『小児看護学（基礎）』にて小児の健康，３年次『小児看護学演習』にて小児に関する看護援助技術と『小児看護学（実践方法）』にて具体的な看護援助方法を学ぶ。

表１　小児看護学演習・実践方法授業計画

回	科目名	内　　容	
1	実践方法	講　義	健康問題を抱えるこどもの療養環境
2	演　習	講　義	小児の看護過程の展開方法
3･4	演　習	実技／GW	看護援助技術／看護過程の展開
5･6	実践方法	講　義	こどもに起こりやすい症状とケア①②（発熱，脱水，けいれん，呼吸困難）
7	実践方法	講　義	こどもに起こりやすい症状とケア③ 事故・救急蘇生
8	演　習	実　技	看護援助技術（沐浴）自己学習
9･10	演　習	実技／GW	看護援助技術（沐浴）試験／看護過程の展開
11	実践方法	講　義	短期的に変化する子どもの身体状況の特徴とケア
12	実践方法	講　義	特別な支援を必要とする新生児・乳児のケア
13･14	実践方法	講　義	手術を受けるこどもの特徴とケア
15･16	実践方法	講　義	長期的な支援が必要なこどもの特徴とケア
17	実践方法	講　義	障がいのあるこどものケア
18	実践方法	講　義	医療的ケアを必要とするこどもと在宅支援
19	実践方法	講　義	病気持つ子どもと家族への支援
20･21	演　習	G　W	看護過程の展開
22	演　習	実　技	沐浴以外の看護援助技術自己学習
23･24	演　習	試　験	沐浴以外の看護援助技術試験／筆記試験
25･26	演　習	発　表	看護過程の展開発表
27	演　習	GW／発表	小児の安全グループワーク・ディスカッション
28	実践方法	講　義	病気や障がいをもつ子どもと家族の生活と経験

『小児看護学演習』と『小児看護学（実践方法）』は，小児の看護過程の展開を実施するには小児の症状別看護の知識が必要であること，看護技術演習には１時限と２時限を通して実施する必要があることから，実技演習と講義を混合して授業計画を立案し，実施している。本年度の小児看護学演習・実践方法の授業計画は**表１**の通りである。小児の安全に関する授業は，第１回「健康問題を抱える子どもの療養環境」，第７回「子どもに起こりや

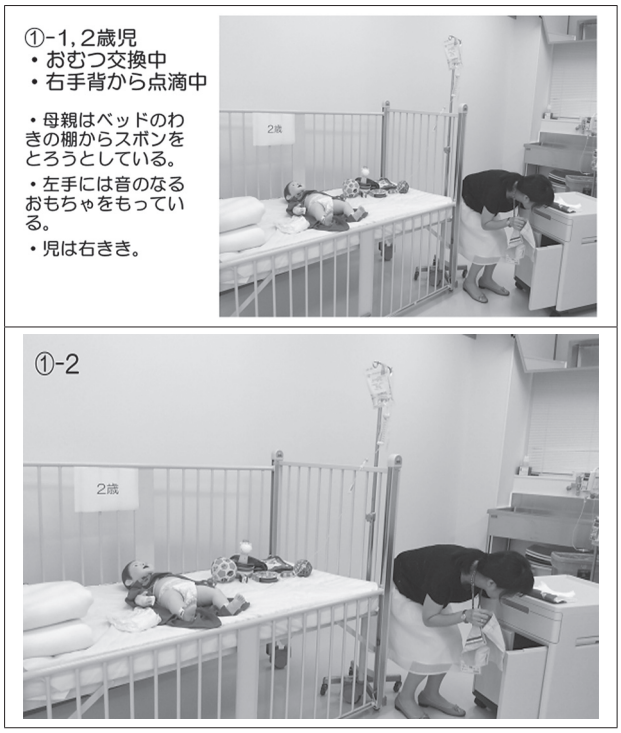

図１　配付資料（１例）

オリエンテーション：５分
・学習目標の説明
・タイムスケジュールの説明
・グループワークの方法の説明
・グループ発表，全体ディスカッションの方法の説明

↓

グループワーク：40分
・各グループでディスカションを実施
・ディスカッション内容を模造紙に記載

↓

グループ発表：20～30分
・１グループ５分程度で発表
・司会は学生が行う

↓

全体ディスカッション：15分
・発達の視点から考えられる小児の事故のリスク
・安全な療養環境を整えるための支援

↓

学習支援システムにて授業の感想記載：５分

図２　授業のタイムスケジュール

すい症状とケア③事故・救急蘇生」であり，小児に起こりやすい事故について講義している。

２．学習目的・目標

１）学習目的

健康問題を抱える小児の療養環境において事故が起こる可能性を予測し，安全な療養環境を整えるための支援を考えることができる。

２）学習目標

①小児の療養環境の場面においてどのような事故が起こるのかを予測することができる。

②小児の発達段階から事故を起こす可能性を考えることができる。

③小児が安全に過ごすことができる療養環境を整えるための支援を考えることができる。

３．演習概要

１）対象学生

学部３年生97名

２）演習方法

（１）演習形式

学生97名を５～６名の小グループに分けて，グループでのディスカッションを行った。小グループは全部で18グループとなったため，18グループを３つの教室に分けた。１つの教室に６グループを配置し，各教室には教員を１名配置した。

（２）教　材

小児看護学実習で遭遇しやすい３場面を写真撮影し，資料とした。３つの場面とは１歳６カ月児がベッドで遊んでいる場面，３歳児が走ってプレイルームに行こうとしている場面，２歳児のベッドでのおむつ交換の場面，である。写真の余白には，例えば発熱・下痢・嘔吐で点滴を実施しているなど，症状と治療，子どもの様子を文章で簡単に伝えている（図１）。

（３）方　法

事前学習として，授業の１週間前に教育支援システムにて，医療安全対策と病棟での子どもの事故に関する２種類の添付資料を読んでくることを課した。また，グループワークのための資料として『生涯発達論Ⅰ』で使用した教科書，『小児看護学（実践方法）』第１回「健康問題を抱える子どもの療育環境」，第４回「子どもに起こりやすい症状とケア③子どもの事故・救急蘇生」の資料を持参することを伝えた。

全グループに３つの場面の写真資料，グループでのディスカッション用作業用紙，グループ発表用の模造紙１枚を配布した。話し合う場面は３つの場面全てではなく，１グループ１場面とし，どの場面を話し合うかについては先に割り当てた。

授業のタイムスケジュールは図２の通りである。授業開始時に演習のオリエンテーションとして学生に対して，①事故につながると考えられる箇所，②事故に結びつくと思った理由，③事故を予防するための支援，の３点について話し合うこと，話し合った内容を模造紙に記載することを伝えた。学生は配布された写真をみながら，グループごとにディスカッションし，グループから出された意見をまとめて模造紙に記載した。

グループ発表では模造紙を教室の壁に張り出し，内容を確認しながら，グループごとに事故につながると考えられる箇所とその理由，支援方法を発表し，全体で共有した。その後，発達の視点から考えられる小児の事故のリスク，安全な療養環境を整えるための支援についてディスカッションを行った。授業の最後に教育支援システムに授業の感想を書いてもらった（図２）。

Ⅲ．学生の感想

学生の感想を使用することに関して聖路加国際大学研究倫理審査委員会にて承認を得た後（承認番号：16-A048），学生にメールおよび教育支援システムに説明書を添付し，感想を使用することに対する同意を求めた。感想を使用することに同意を得た，欠席者を除く学生88名の感想を分析した。学生の感想は，学生の学びに関することに注目しながら内容が類似しているものをまとめた。

結果として，学生の学びとして３つのカテゴリーと，その他の項目として授業内容と時間配分について抽出された。以下表記として，【　】はカテゴリー，「　」は学生の記載した感想である（表２）。

１．学生の学び

学生の学びとして，【小児の安全への理解の深まり】【安全な療養環境の支援に必要な能力の気づき】【看護実践への気づき】の３つがあった。

１）【小児の安全への理解の深まり】

【小児の安全への理解の深まり】には，小児の特徴と事故との関連の理解，観察の視点と援助方法の知識の広がり，があった。

（１）小児の特徴と事故との関連の理解

事故の危険性について「大人と違って事故のリスクが多い」と成人と比較しながら，「小児は危険だと気がつくことができない」「好奇心が旺盛である」「こちらが想像もしていないような行動をとる」といった，小児の特徴と事故とを関連させて安全をとらえていた。「何気ないことが事故をおこすきっかけになる」「日常生活にはいろいろな危険がある」といった，療養環境には危険が潜んでいることへの気づきと，安全を意識して小児にかかわることの必要性をあげていた。

（２）観察の視点と援助方法の知識の広がり

学生はグループや全体のディスカッションにおいて「いろいろな意見が聞けた」ことで，「自分では気がつかなかった視点があった」「こんな方法もあるのかと気がついた」ことで，観察の視点や援助方法の知識の広がりを感じていた。

２）【安全な療養環境の支援に必要な能力の気づき】

【安全な療養環境の支援に必要な能力の気づき】には，瞬時に危険性を判断する能力の必要性，事故の危険性を予測する能力の必要性，があった。

表２　学生の感想分析結果

１．学生の学び
【小児の安全への理解の深まり】
・小児の特徴と事故との関連の理解
・観察の視点と援助方法の知識の広がり
【安全な療養環境の支援に必要な能力の気づき】
・瞬時に危険性を判断する能力の必要性
・事故の危険性を予測する能力の必要性
【看護実践への気づき】
・発達段階にあわせた実践
・全体像を捉えた実践
・周囲の大人が環境を整えること
・小児に対して安全への理解を促す
２．授業内容
・楽しく実施できた
・実習に活かせる内容だった
３．時間配分
・内容を深めたかった
・短時間で集中して学べた

（１）瞬時に危険性を判断する能力の必要性

事故の危険性を判断することについて，「じっくり考えるアセスメントとは異なり，瞬時に危険か，危険ではないかを判断する必要がある」ことの気づきをあげていた。瞬時に危険性を判断するには，「療養環境をみて危険因子を察知する能力」と「限られた時間のなかで的確にアセスメントすること」が必要であり，それには「判断のスピードをあげること」「危険察知能力のセンスを磨き続ける姿勢が必要」といった学習の必要性をあげていた。また，瞬時に判断する必要性は理解できるが，「実際の場面ではどのようなことに注目しながらアセスメントすればいいのかわからない」「実習で自分が判断することは難しいと思う」といった，実際の臨床場面での難しさを感じている学生もいた。

（２）事故の危険性を予測する能力の必要性

小児の安全を守ることについて，小児の療養環境では「あらゆる危険を予測して事故を防いでいくことが必要である」といった事故の危険性の予測があげられた。事故の危険性を予測するためには「発達段階の知識をもとにあらゆる危険性を予測する」「小児の動きを具体的にイメージすることで予防策を見出すことができる」といった，小児の特徴をとらえることの必要性があげられた。また，事故の危険性を予測したうえで，「発達段階に応じた安全対策を行う」ことや「安全な環境を整えること」が必要であり，「危険があることを意識すること」の重要性もあげていた。

３）【看護実践への気づき】

【看護実践への気づき】には，発達段階に合わせた実践，全体像を捉えた実践，周囲の大人が環境を整えること，小児に対して安全への理解を促す，があった。

（1）発達段階に合わせた実践

小児は成長発達の途上であるという特徴から，小児の認知や身体機能の発達により「安全の視点の違い」「援助方法の違い」があり，「発達段階に応じて環境を整える」「昨日できなかったことが今日できるという日々の成長を理解して環境を整える」といった発達段階に合わせた実践が必要であることの気づきをあげていた。

（2）全体像を捉えた実践

小児の安全に関する看護実践には，「発達段階だけではなく性格や生活環境，身体状況，精神状態など，多角的に情報収集すること」といった，小児の全体像を捉えることが必要であるという気づきをあげていた。また，「生活の変化や環境など視野を広げて全体像を捉え，個別性のある看護を実践するには経験が必要なのではないか」という感想もあげられた。

（3）周囲の大人が環境を整えること

「小児は危険を予測することができない」ため，小児に対して安全な環境を提供するためには，「周囲の大人が危険を取り除く」「小さなことにも注意を払うこと」といった，大人が環境を整えることの必要性があげられた。周囲の大人とは看護師だけでなく親も含まれており，「親に対しても危険性を説明し，親とともに小児の安全を守っていく」といった，看護師だけでなく親とともに環境を整えていくことの必要性をあげていた。

（4）小児に対して安全への理解を促す

小児の安全な環境に関して周囲の大人が環境を整備するだけではなく，「小児の成長発達に合わせて小児への説明が必要になる」といった，小児にも事故の危険性について説明し，理解を促すような看護実践も必要であることをあげていた。そして小児への説明には，「小児の発達段階に合わせて理解してもらえるような説明」が必要であり，また「危険であることを認識できるような工夫」が必要であるということをあげていた。

2．授業内容と時間配分

授業内容については，【楽しく実施できた】【実習に活かせる内容だった】があった。時間配分については，【内容をもっと深めたかった】【短時間で集中して学べた】があった。

1）授業内容

グループワークと全体でのディスカッションについては，間違い探しのようで【楽しく実施できた】があげられた。また，「小児の安全を深く考える機会」になり，「実習で遭遇する可能性のある場面であると思う」ので，【実習に活かせる内容だった】という感想があげられた。

2）時間配分

グループワークの時間を40分で設定し実施したが，「模造紙に記載する時間が少なかった」「検討する時間が足りなかった」「中途半端な感じで終わった」といった，時間が不足し【内容をもっと深めたかった】と感じた学生がいた。しかし一方で，「短時間でも学びが深かった」「集中して討議できたため負担が少なく学びもあった」といった，【短時間で集中して学べた】と感じた学生もいた。

3．教員からの意見

教員からの意見として，グループワークをする時間の不足，スライドを使用するなど効果的な発表資料提示の方法の検討，より臨床に近い状況でのアセスメントや判断が体験できるような授業内容の検討，があげられた。

Ⅳ．考　察

医療の現場で発生する患者の安全が脅かされる状況はさまざまである。患者安全教育において，多数のインシデント・アクシデント事例一つひとつについて，起こった原因や具体的な対応を教えるというような，状況一つひとつに応じた対応を知識として教えることはきわめて難しい[5)]。そのため今回の演習では，小児看護学実習において遭遇しやすい場面を3つ選択し，写真を使って患者安全教育を行った。実際の臨床では，患者も看護師も時間の流れのなかでいろいろな場所でさまざまな動きをしている。そのような動きのなかで看護師は事故の危険性を予測し，判断し，対応をしている。小児の安全を守るためのアセスメントにはスピードが求められる。学生が臨床の場面において安全な療養環境の支援を行うには，小児の身体状態や治療と療養環境を観察し，素早い判断と予測，対応が求められる。それには切り取られた場面を見て判断し，予測するではなく，動画などで小児と看護師の動きを見ながら瞬時に危険性を判断，予測するというような，アセスメントのスピード感を体験できるような学習内容にする必要があるだろう。

学生は今回の授業により，小児に対して安全な療養環境を提供するには，小児に関する基礎知識の必要性と，多角的な情報収集，具体的な看護実践が必要であると気がつき，看護実践には，危険性を判断する能力と危険性を予測する能力を必要とすることを学んでいた。これらの学びは，持ち寄った資料を活用しながら今までの知識を統合させ，グループメンバーとディスカッションを行いながら，アセスメントと看護計画の立案を体験したことで得られた学生の学びである。グループメンバーとのディスカッションを通じて，小児の療養環境に潜む危険性とその理由を共有することで，自分では気がつかなかったことや見落としていたことに気がつき，小児の安全に対する認識を深めていたと考える。

実際の臨床において患者の安全を確保するためには，知識と経験に裏づけされた判断力や実践能力だけでなく，

言葉を省略せず状況を明確に相手に伝えるというようなコミュニケーション能力も必要である[6]。患者安全における知識と実践能力は，学生が卒業後に求められている能力であるとされ[3]，学生のうちから判断力や実践能力，コミュニケーション能力を磨くことが必要となる。今回の授業では，小児の安全への認識を高め，必要な知識や能力の発見はできたが，実際の臨床場面でのアセスメントの実施や安全な療養環境の提供といった，実践には至っていない。危険を予測し，判断し，実践する能力を育成するためには，より現実に近い状況設定のなかで，学生一人ひとりが危険性を判断し，予測し，実際に安全な環境に整える，という体験が必要である。また，学生が言葉を省略せず状況を明確に相手に伝える体験も必要である。そのような体験を積み重ねていくことで，患者安全の知識や判断力，実践能力が養われていくと思われる。体験を積み重ね，患者安全を実践する能力を習得し向上するには，小児看護学実習での実践が欠かせないだろう。学内の演習から小児看護学実習での実践につなげ，実習の場で小児の安全を実践できるように学生を支援する必要がある。来年度は学内の演習方法とともに，学内の演習から小児看護学実習へと継続した患者安全教育の実施方法や教育内容の検討が必要である。

Ⅴ．まとめ

今回実施した患者安全教育は，学生の小児の安全への意識が深まり，必要な能力を見出すことができる内容であった。来年度の課題としては，さらに小児の安全への理解を深め，看護実践へとつなげていく必要がある。そのためには，動画など実際の臨床場面に近い教材の開発や，学内の演習から小児看護実習へと継続した患者安全教育の検討が必要である。

引用文献

1）東京医科大学医学教育学・医療安全管理学．WHO患者安全カリキュラムガイド多職種版．[2016-08-18]．www.who.int/iris/bitstream/10665/44641/3/9789241501958_jpn.pdf.
2）西海真理．医療安全対策．添田啓子，鈴木千衣，三宅玉恵他．看護実践のための根拠がわかる小児看護技術．メヂカルフレンド社；2016．p.41－42.
3）石川雅彦．なぜ，卒前から医療安全教育が必要か．看護教育．2008；49(8)：756－761.
4）石川雅彦．医療安全教育の基礎として，何を教えるか．看護教育．2008；49(10)：948－953.
5）石川雅彦．今，求められている医療安全教育．看護教育．2008；49(9)：854－859.
6）石川雅彦．どのように医療安全を学ばせるか．看護教育．2008；50(1)：78－83.